
通称 ごみダメ (ぼつネタ集)

荒畑縄笠山

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

通称 ごみダメ (ぼつネタ集)

【Nコード】

N7281X

【作者名】

荒畑縄笠山

【あらすじ】

連載作品、その他連載まで行かなかった残念なネタ話の倉庫です。整理のために設置したものですから、不定期更新です。

NOポイ捨て禁止！ を心情にぼつネタにも愛を注ぎます。良かったらお立ち寄りください。

クレアとシュナイゼル 中華の婚約騒ぎ前（前書き）

会話文です。

大変読みにくいとは思いますが。直す気はありません。（だめじゃん）

それでも良いという方のみ お進みください。

場面はR2の中華連邦の話前。

政庁に来ていたおり主さんと腹黒皇子が、偶々鉢合わせたらという有り得ない設定。

クレアとシュナイゼル 中華の婚約騒ぎ前

やあ、久しいねクレア。

こんなところで会いたくない相手No.1のあなたは、私に何か用？
つれないね。君はいつも。

それで結構。用がないなら帰らせていただくわ。
用ならあるんだ、残念ながら。

……それって勿論、私が残念の方なのよね？ますます帰りたい
わ。

早速ではあるけれど……
スルーなのね。

今度中華連邦で我が兄、オデュッセウス兄上の婚約披露パーティー
が開催されるんだ。それで君に私のパートナーとして出席して欲し
いのだが……。

お断りします。

勿論、ただでとは言わないよ。それなりに良くさせてもらおう心算だ。
結構です。見返りなんて要求しようものなら、絶対上乘せされるの
がオチだもの。

おや、いいのかい？私が口添えするだけでアツシュフォードは救わ
れるというのに。

それこそ、余計なお世話です。心配していただかなくても、私が何
とかしてみせますから。

……本当に君はつれないね。でもまあ、君がそういうのならそう
いうことにして於いてあげるよ。

何か微妙に嫌なニュアンスを含んでいる気がするわ。もし、邪魔を
しようものならこちらにも考えがありますので、ただで済むと思わ

ないでくださいね。

それは、私がおかすることが前提だね。心外だな。

貴方は、宰相であり皇子殿下ですからね。一貴族を潰すのなんて簡単でしょう？

相手が君なら、それも面白そうだね。

貴方と結婚する女性に同情します。仮面の下はこんなにとす黒いなんて、サギよ。

そうだった。話はそれたけれど、兄上の婚約披露宴出席してくれるよね？

ここで権力を使おうものなら、それこそ先ほど言った考えを実行します。

・・・これはまた、手痛そうだね。面白そうだから、それでもいいんだが。

軽蔑しますよ。

冗談だよ。まあ、君以外にも付いてきてくれる女性にはいるのだけだね。

ならその女ひとと行ったら良いじゃないですか？

おや、気にならないのかい？

何ですか？

・・・ますますつまらないよ。どうしたら誘いに乗ってくれるのか教えて欲しいよ。

それを本人に聞く貴方の神経を疑います。

君に変化球は通用しないからね。直球が有効とも言えないけれど。

ああ、そういえば。

？

君の妹さんとその婚約者は出席するそうだよ。

そうですか。

君が来たらさぞや驚くだろうね。

興味ありません。それに、妹とは一つ屋根の下に住んでいますから、

お互いの予定はある程度把握できます。

このまま帰さなかったら驚かせることは可能だと思っただけだね。

！？拉致する気ですか？本当に悪趣味ですね。

君が大人しく捕まるなんて考えられないね。

貴方が言うのと、腹が立ちます。

一緒に来て欲しい。

お断りします。

これでもダメか。君は本当に靡いてくれないね。どうしてだい？

私の信念に基づいて、です。それ以上を貴方にいう気はありません。

そうか。なら仕方ないね。今回は他の女性を誘うことしよう。

やっと諦めが付きましたか。

君に対してだけだよ。今回はこれでもあっさり引いているほうなんだが。

ご冗談。貴方に言われると鳥肌が立ちます。それに、それであっさりなんて。ますますお近づきになりたくないタイプですわ。

この程度でしつこいと言われると、君のパートナーはつまらない男だね。

一言余計です。私の選んだ人なら、私だって掛け合いを楽しみたいですもの。それなりに面白い方だと思いますわ。

ということは、君の想い人は未だ定まらずかい？

ふふ。例えそうであるうとなかろうと、貴方に関係ないじゃないですか。

奇遇だね。私の想い人も未だ定まらないのだよ。

貴方のパートナーを見てみたいですわ。

どんな物好きか、かい。全く君には不敬罪が過ぎるよ。

あら、私は何も言っておりませんもの。それとも、疑惑のみで投獄なさいますか？

まさか。君が捕まったら私の楽しみが減るじゃないか。

私は貴方の体の良い駒になんかなりたくありませんので。断固として反発させていただきますわ。
ははははは。それは楽しみにしているよ。

貴方との会話は疲れますわ。

そうかい？それでは、この続きはまた今度に持ち越そうか。

次が一生来ないことを祈りましょう。

では、君に会いに行くとしよう。

お待ちいたしませんわ。

待つ必要はないよ。驚かせに行くのだから。

一般の生徒に迷惑ですわ。貴方のお立場を考えて行動なさってください。周りがいい迷惑です。

おや、心配してくれるのかい？

ええ、勿論。カノン卿の胃と頭痛が心配ですわ。

カノンがそんな持病を持っていたとは……。知らなかったよ。

将来性のお話です。カノン卿の皺とおでこのラインを今のうちから

心配してあげるのが、良い主というものではありませんか？

まあ、心の片隅にでも留め置くことにするよ。

クレアとシュナイゼル 中華の婚約騒ぎ前（後書き）

ありがとうございました。

if クロヴィス救出1（前書き）

投稿が滞ってしまっていました。書きかけが溜まってきたため整理します。

原作軸のお話です。

本編、日本編終わってないのに・・・しかも、この続きも迷走中とかウザクめっ（やつあたり）

if クロヴィス救出1

「そこまで。」

室内に響き渡るもう一つの声。

驚く2人は固まったまま視線だけ声の主の方に向く。

声の主は悠々と2人の間に立ち、素早くルルーシュが持っていた銃を蹴り落とした。

「君には申し訳ないけれど、こいつはここでは死なせない。

代わりに死んだことにしておくから、今日のところは引きあげてくれないか？」

仮面を被ったその人物は、とんでもない発言をする。

「！！そんなこと、出来るものか！それに、こいつは無抵抗の一般市民を虐殺したんだぞ?!」

「……。」
「たしかにそうだ。だが、こいつが死んでも死んだものは生き返りはしない。」

「ああ、そうだな。だから、そいつを殺して、この俺の叛逆のろしとなつてもらおう!!」

ルルーシュの発言に一層ショックを受けるクロヴィス。固く目を閉じ、決意を固める。

「……そうだ。私は、せめてこの子のやりたいようにさせたい。邪魔をしてくれるな。」

そんな2人に私は

「おまえら、身勝手にもほどがあるぞ？」

一旦大きくため息をつき、クロヴィスの方を向く。もちろんルルーシュが武器を取らないように警戒しながらだ。

「まず、クロヴィス。あんたはもうすでにたくさん命を奪った。償えるもんじゃない。恨みもさぞや酷かるう。だがな、ここでこいつに殺されるのは、訳が違うぞ？」

こいつは、己の野望のためにお前を殺すんだ。死んで逝った奴やその家族を理由にしたって、結局のところそれに変わりはない。

ならば、お前は絶対こいつに殺されるな。なぜなら、お前を殺したところで何も変わりはないのだから。」

これにはルルーシュが反論する。

「いい加減なことを言うな！皇族を殺すんだぞ！何も変わりはない訳無いだろう！！」

「いや違うな。こいつが死んだって、他の奴が出て来て終わりだ。お前の華々しいデビューに使えないことと、他に変わるとしたら、新たな恨みが増えるだけだ。」

これにはっとしたのはクロヴィスの方だ。ルルーシュはもう予想はしていたのだろう。激昂していたのが一気に無表情に変わる。

しかし、予想は予想だ。現実には掴めていないだろう。

「……良いか？少年。こいつは皇族で、肉親を殺されるのも皇族だ。……こいつが殺した以上の犠牲が出るかもしれないんだぞ？」

憎しみの連鎖はそう簡単に切れるものじゃない。

「そうしたら、その死者の関係者が恨む。殺す。恨む。殺す。・・・切りがない。意味が無いんだ、そんなんじゃない。」

一気に場が沈黙する。

「・・・だが、こいつがこのまま生きていたって力なく言うルルーシュに、

「ああ、そうだな。・・・だから、こいつには、生きて償ってもらおう。」

新たな世界を創る者として、精一杯生きて、馬車馬のごとく働いてもらう。」

「こいつに、何が出来ると言っただけ？今までだって、こいつがしてきたことは無駄なことばかりだったじゃないか？」

恨みのこもった視線をクロヴィスに向ける。さらに小さくなっていくクロヴィスを見て、さらにため息を零す。

「それは、こいつの力不足を補う奴らが、正常に機能していなかったからだ。」

こいつは政治よりも文化芸術面においては優れた才能を発揮していたから、使い方を誤らなければ使い道はまだあるぞ？」

僅かばかりだがな。と上げておいて落とす私を、クロヴィスは悲しそうに見つめてくる。

ふん、事実なんだ。お前が悪い。

「それから、少年。こいつを殺して反逆の狼煙を上げる、と言っていたが、

それは何に対しての反逆だ？」

「ブリタニアに決まっているだろう！他に何かあると言っただ！！」

一度冷めていた表情が、先程よりも酷く激情する。

「では、反逆して得られる結果を考えたか？」

これに、眉をひそめ、何が言いたいと目線で問ってくる。

「私は、その成功、失敗を言っている訳ではない。

・・・先程も言ったように、お前が起こしたことで、死ぬはずじゃなかった人間が死ぬかもしれない。

それは、ブリタニア軍が殺したものでも、反逆するお前を捕まえるためなら、全てお前が背負うことになる。

人の命は、お前が考えている以上に重い。

お前は背負えるのか？お前の身勝手が起こしたがために、死んで逝くそのすべてを。

そして、それが釣り合うと思うか？」

「・・・しかし、このままで在っていい訳無いんだ。何もせずとも死んで逝くものは多くいる。

たとえ、恨まれようとも、誰かがやらなきゃ。俺がやらなきゃ、未来は閉ざされたままなんだ！！」

涙は出ていないが、泣き叫ぶように言うルルーシュに、

「皇族に戻って帝位を争う気はないのか？」

ルルーシュが皇族であることを知っているのをハッキリさせる。これには、2人とも渋面を作る。

「俺は、皇位継承権は放棄している。あつたとしても、十七位じゃ無理だと、悔しさを滲ませる。

ブリタニアに恨みを持ち、憎んで来たルルーシュがそれを考えたのは、偏に無関係なものの犠牲を少しでも減らすことを考えたのだろう。こいつは、本当に優しい奴だから、そう考えてくれると思っていた。

それに私は、ごめん、と心の中で謝罪する。

「こいつを使う気は無いのか？」

「傀儡にしたとして、今までこいつは無能だったんだ。帝位を継げる可能性は低い。」

クロヴィスはもうすでにとぼしにとぼされ、とつくに地に着いただろうが、さらに地面に埋められた様な顔をした。

「なら、余計に君はいづれ皇族復帰をしたほうがいい。」

「何故そうなる？」

「君が后妃マリアンヌの息子だからだ。」

「知っているか知らないが、皇妃マリアンヌの人気は一般市民や軍人の中で高い。まさに、シンデレラだからな。

しかも、君の後見のアッシュフォードは衰退してしまったが、その他の貴族の中に熱狂的なマリアンヌ皇妃の信望者がいる。

そいつの名は……。」

そこまで言つと、そとではたばたと足音が響く。

「ちつ。長居しすぎたな。一旦引くぞ。 クロヴィス、歯あく
いしばね!」

取り出したナイフで左腕を斬りつける。床に大量の血液が散らばり、
斬りつけたナイフを無造作に放る。

そして、手早く止血し、そこ以外に血を落とさないようにさらに服
を着せる。

「何をする?!」

「殺されないだけ増しだろう。それよりここからずらかるぞ。早く
!」

そこから、通気口とルルーシユのギアスで脱出。
ギアスを使うルルーシユに、クロヴィスは大層驚くが、質問してい
る状況に無いため今はひたすらスルーした。

かなり離れた位置まで来て、漸く立ち止まる。

後ろの2人は体全身を使って息をしていた。

「・・・ここまで来れば、とりあえずは平気だろう。君はここから
一人で帰れるか?」

「そ……いつ……は、どうつ……するんだ？」

息を整えながら聞いてくるルルーシュに、

「帰す訳にもいかんから、こいつは私が預かる。安心しろ。ちゃんと、死んだように見せかける工作はしておくさ。」

こいつの生死関係なく、ここまでやったら同じだろうしな。

後日、どこかの海岸にこいつの血糊べつたりな服が流れ着くだろう。

そういうと、まだ疑いの目を持ってみてる。

「信用しろと？ 仮面で隠したままのお前を？」

言外に外せと言うと、それは出来ない、とにべもなく返される。

「ああ、とりあえず今はな。……連絡先だ。何かあったら連絡してくれ。」

アドレスの書いたメモを渡す。ルルーシュはその場で登録し空メールを送ると自分の携帯にそれが届く。

それでも、疑わしいことに変わりはない。

しかし、ルルーシュは正体を握られているため従う意外他に方法はない。

(くそつ、ギアスが効けば問題ないのに!!)

仮面越しでは効かないということを知ったルルーシュは、口を切らんとする程噛み締める。

未知の能力の制約を知ったルルーシュは後日いろいろと試さなければ

ばと画策する。

ルルーシュは、ここはどう仕様もないと悟ると、踵を返し帰っていった。

それを見送る自分と、クロヴィスはまだ動こうとはしなかった。

「で、とりあえずあんたのその服を着替えてもらわないとね。」

ハイこれ、と渡されたのは女性用の服一式。

どこから出した、とか今そんな問題ではなく

「これを、わたしに？」

赤いハイネックのシャツに、黒のロングスカートとカーディガンを
を見て、洗面を作るクロヴィス。

「勿論。さっさと着替えて、移動するぞ?・・・逃げようとしたら、
潰すぞ?」

どこを、とは聞かないことが懸命だと悟り、さっさと着替えて戻っ
てくると

「クレア!?!?」

今まで仮面で顔を隠していた正体不明な人物は、今は惜しげも無く晒していることに驚きを隠せない。
しかもそれは、昔なじみだ。

あいたままの口をぱくぱくさせていると、

「さつさといくわよ、クロヴィス。あ、もう敬語とか使わないから。

」
皇族じゃないしねえ〜。

口調も女言葉に戻っているが、それよりも

「元々、クレアは皇族に対して遠慮なんて無かったじゃないか・・・」
。

言葉遣いが粗雑になったところで、今までと変わらないというと、

「当然！だって私は、己という領土を何者にも侵されることは無い、不羈^{ふき}の民となることを誓ったもの。」
私の唯一の王は、私だ。と言うクレアに、クレアらしいと思うのは当然で、

「どこからそんな思考回路が生まれるのか、ぜひとも君の脳を解析してみたいよ・・・」
呆れ口調で言うクロヴィスに対し、これは本の受け売りだ、と笑って言うクレア。

少しカッコいい、と思ってしまったこの気持ちのやり場を失う。

「で、これからどうするんだい？」

「うん。とりあえず、家に来てもらおうか。」

家「アツシユフォード、である。がしかし、

「そうそう、今ルルーシユもそこにいるんだけど、会わないように気をつけてね？」

勿論、ナナリーにも。

さらに、

「なんだか知らないけれど、家の地下に巨大な施設があって、居住空間も広いから100人くらいなら全然平気よ。」

と言っていた件の施設を見て、

「・・・クレア、アツシユフォードは反逆の意志があるのかい？」

「まさか。ただ、地下に潜って、今まで開発していたナイトメアの改良を、さらに研究していただけよ。」

何か含みを感じるその良い方に、

「現当主は君の祖父だったね。そんなに立腹かい？」

「うーん。まあ、そこそこ？」

そこそこ、でここまでやってしまうアツシユフォードに、弱冠引きつつも今は有難く使わせてもらおうと、クロヴィスは全力でスルーした。

i f クロヴィス救出1 (後書き)

駄文失礼しました。

本編が繋がり次第、こちらは消去するかもです。

i f クロヴィス救出2 *グロ表現注意(前書き)

前話の続きです。

流血表現がありますので、苦手な方はご注意ください。

if クロウイス救出2 *グロ表現注意

今、私とクロウ`イスは、ニーナに対峙している。

「えっと……。今日からここで世話します。クロウ`イス・ラ・ブリタニア殿

下こと、クロちゃんです。」

「……。」

「クロウ`イス・ラ・ブリタニア、改め、クロウ`イスだ。

あの、宜しく頼むよ。」

「……。」

何で無言??ニーナさん!

やっと口を開く

「経緯はこの際どうでもいいの。ただ、」

「ただ?」

「何なの、その格好?!」

今の格好、

つまり、クロウ`イスの女装だろうか。それとも

「何で血だらけなの、クレア!?!」

そう。私の服のいたるところに血が付いている。

全て他人のものだが、

「いや、クロウ`イスと二人で歩いて帰ってたんだけどさ。

女装があまりに似合っちゃってて、ナンパ男どもを伸してたらこんなことに……

」

あははは、と笑って言うてみたけれど、今のニーナさんに効果は0だった。

「……ましい。」

「はい？」

「羨ましいっ！」

クロウ、イス殿下はクレアに守ってもらって、ご自分では何もなさらなかったんですか？」

恨みがましい目で、クロウ、イスを睨み付ける。

この反応にどうしていいか分からないクロウ、イス。

「……………えっと……………」

目線でクレアに助けを求める。

「何時ものことだから、放っておきましょう。」
ドライだ。

しかし、女性からこんな扱いを受けるのは初めてなので、

「……………君が、何に対して私にそこまでの感情を向けるのか分からないけれど、
クレアを守ってあげられなかったことに対して、ごめん。」
守る必要がなかったんだ。

と、何故かニーナに謝るクロウ、イスに

「っ当たり前でしょ！クレアはとっても強くて、カッコよくて、きれいなんだから！」

「……………」

クロウ、イスには、用事と部屋の案内を先にしておいたから、私はさっさと部屋に戻って寝ることにしたが、

クロウ、イスの方は、ニーナが私の武勇伝？なるものを、延々と聞かせていた。

朝、ニーナはいつも通りパソコンで作業していたが、クロウ、イスはすごく眠そうだ。

「おはよう、クロウイス。……元気？」

「……おはよう。クレア。元気そうに、見えるかい？」

あはは、と苦笑してやり過ごした。

「で、今朝は何だい？」

ああ、そうそう、とクレアが取り出したのは「水鉄砲？」

ピストル型の水鉄砲だった。それを何に？と問うと、

「今から、死体工作します。なので死んでね。」

ビュー、と飛び出したのは

「!!!? 血?!!!」

「そうです。大変趣味が悪いけど、ま仕方ない。はいはい、さっさと死んで」

「!!!? まさか、昨日の血液採取って!!!」

昨晚、部屋の案内の前にそんなことをしたものだから、流石に気にはなっていた。

あ、そうだ。

「皇族のあの服じゃなきゃダメよね? やり直し」

それから何とも言えない一方的な水鉄砲の攻撃があった。

「これ、僕じゃなくて人形でも良かったんじゃない? . . . ?」
と恨みがましく見られた。

「じゃあ、頼んだよ。カグラ。」
件の血まみれ皇族服を、からすのカグラに捨てて来てもらう。

流石に服だけだし、暗い夜、カグラが一羽飛んでたって目立ちはないだろう。

流れの速くて大きな川に捨てて来てもらうから、見つかるのは海だろうか。もしかしたら見つからない可能性もあるが、まあどっちだっていいや。

後日、その服は発見され、実際に斬りつけた腕以外にも、腹部を斬りつけておいたため、（これは人形に着せてから斬った。）
致命傷はこちらだろうと、推測され捜査は続くものの、ほぼ希望は薄いだろうということとなった。

そして、

『出ました。これがクロヴィスでんか消失事件の犯人とされる枢木スザク容疑者です。枢木容疑者は、元日本国最後の首相枢木ゲンブの一人息子でーー』

なんで、あいつが

if クロヴィス救出2 *ゲロ表現注意(後書き)

またしばらく不定期更新が続きます。

宜しくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7281x/>

通称 ごみダメ （ぼつネタ集）

2012年1月9日00時47分発行